

幼児教育の専門性を育む
— 遠隔授業の中で学生とのつながりを考える —

Fostering a specialty in early childhood education:
Thoughts on student interactions in distance learning.

久米 裕紀子, 脇田 栄, 村岡 節子
坂本 美佐子, 金光 文代, 両角 妙, 佐藤 知子

KUME, Yukiko WAKITA, Ei MURAOKA, Setsuko
SAKAMOTO, Misako KANEMITSU, Fumiyo MOROZUMI, Tae SATO, Tomoko

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第6号 2021年

幼児教育の専門性を育む
—遠隔授業の中で学生とのつながりを考える—

Fostering a specialty in early childhood education:
Thoughts on student interactions in distance learning.

久米裕紀子*, 脇田 栄**, 村岡 節子**
坂本美佐子**, 金光 文代**, 両角 妙**, 佐藤 知子**

KUME, Yukiko WAKITA, Ei MURAOKA, Setsuko SAKAMOTO, Misako
KANEMITSU, Fumiyo MOROZUMI, Tae SATO, Tomoko

キーワード：つながり 幼児理解 保育の専門性 共有 遠隔授業

1. はじめに

令和2年度の前期の授業は、コロナ渦のため、遠隔授業でスタートした。遠隔授業とは、授業の一部または全部の時間について、教員と学生が直接対面せずにインターネット等を用いた教授・学修を行うことである。その方法として、学生と同じ時間に授業を行う同時双方向型（ライブ形式）と学生が指定された期間内に学修するオンデマンド型（収録型）があると大学のガイドラインに記されている。昨年度の研究に引き続き、「幼児教育の専門性を育む」ための授業を今年度はどのように展開していくのか、遠隔授業で進めていくために、どのような工夫が必要かということを大学・短期大学における保育内容に関する科目の授業担当教員で話し合った。遠隔授業であっても、できるだけ対面授業に近いかたちで学生と向き合っていくことが全員の共通の思いと確認し、前者の同時双方向型授業（ライブ形式）で行っていくことにした。

幼稚園における保育とは、本来、一人一人の幼児が教師や多くの幼児たちとの集団生活の中で、周囲の環境と関わり、発達に必要な経験を自ら得ていけるように援助する営みである。そのためには、教師は幼児と生活を共にしながら、幼児が今、何に興味をもっているのか、何を実現しようとしているのか、何を感じているのか等を捉え続けていかなければならない。幼児が発達に必要な経験を得るための環境の構成や教師の関わり方も幼児を理解することによって、初めて適切なものとなる。すなわち、幼児を理解することが保育の出発点となり、そこから、一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出されてくる。幼児理解が保育の出発ということを踏まえ、遠隔授業では、まず、担当教員と学生が授業でつながっていくということを意識することが重要である。保育は、幼児理解が出発であるということを学生に伝えるために、遠隔授業をどのように展開していくのか、各授業担当教員が工夫し、互いに連携を取り合い、共有していくことにした。この実践報告では、授業を進めながら、授業の見直し、新しい試み等、授業での取り組みや成果と課題を共有し、遠隔授業であっても確かに学生とのつながっていくことを目指したものである。なお、本論文に掲載されている園児や学生の写真については、許可を得て掲載している。

2. 遠隔授業（ライブ形式）で目指すもの

遠隔授業は、同時双方向型授業（ライブ形式）で、できるだけ対面授業に近いかたちで行うためにGoogle、Meetを使用した。しかし、学生の通信環境が十分でないことも予測し、オンデマンド型で

* 教育学科講師 ** 教育学科非常勤講師

授業が受講できるようにしていく必要性も確認し、音声付きスライド動画を Google Classroom に UP し、復習にも役立つようにしていくことにした。できる限り、学生に寄り添う姿勢を示し、学生とのつながりを大切に授業を展開していくことを目指した。元園長、現職の園長で構成されたこの研究グループのメンバーは、学生が保育者になりたいと思える授業、子どもの姿を思い描くことができる授業を展開していくことに努めていくことが、幼児理解や専門性を育てることにつながっていくことだと考えている。そして、次のことを共有していくことにした。

- 同時双方向型授業（ライブ形式）の中でのトラブルや失敗からの学び：はじめての遠隔授業である。パソコンの操作に不慣れなので実際に起こったトラブルや失敗、気づきを互いに知らせる。
- 学生の声（反応）・要望：学生が Google, Meet に参加できているか、学生の反応、通信状況等を把握する。
- 授業課題の内容等：授業課題など出題について、重複がないか等を確認する。

同時双方向型授業（ライブ形式）に関しては、学生の方は直ぐに使いこなすと予想し、学生からの声を正しく受け止めていくことが重要であると考えた。担当教員が、操作に不慣れなので学生から学ぶことが多いと考え、その学びをグループ共有できれば、より遠隔授業の工夫につながるのではないかと考えた。

3. 「保育者論」の授業の成果と課題：短教1年生

（1）授業の考え方

担当教員同士（2名）で、できるだけ、「学生が保育の様子や実践を思い描き、将来、保育・教育のできる日が楽しみになるよう」また、「遠隔授業で行える学生とのやり取りを重視し、コミュニケーションの取り方を工夫し、その喜びが授業のモチベーションになるよう」との趣旨をもち、授業構成を試みていった。

（2）授業の進め方

授業ははじめの出席確認をどうしていくかということについて考えた。課題を提出すれば出席になるという大学側からの指示はあるが、ライブ形式を活かしたい、学生とのつながりをもちたいと考えた。一年生なので、お互いに一度も顔を合わせていないことを考慮して、互いの声を聞き合うために一人ずつ名前を呼び、マイクを on にして返事をしてもらった。1回目は、on にするタイミングがずれることもあったが、全員が返事を返してくれた。2回目以降は、学生の方が待ち構えて返事をすることもあり、スムーズに出席確認ができた。時間的にも5～10分弱である。この出席確認を質問形式に変えていった。はじめは緊張もあったようだが、クラスメートの意見や好みが聞け、興味深い時間となっていくようである。ほんの少しのやりとりの中で、大学生になったばかりの学生が、クラスの仲間との小さなつながりを感じ、友達の意見や授業担当教員と関わるよい機会となった。次に取り組みを事例で記していく。

事例1) 「心にひびいた言葉」

友達が好きな歌や部活の先輩等からいただいた言葉等をあげているのを聞くことで、視点を広げて考えられる人が増え、素晴らしい言葉がたくさんあった。授業後、この時間がとてもよかった、参考になった、はっとさせられた等の感想が寄せられた。

事例2) 「保育を伝えていく」

- 朝食は何を食べたか？：幼稚園で朝食を食べてきたかを遊びで確認し、友達と一緒にということが楽しめることもであると伝える。「朝ごはん食べてきた人」とスキップをすると、半分の子ども

がスキップをしないので、「食べてこなかったの？」と聞くと「パンは、食べた」と返ってきた事例等を話す。A児とC児は「おにぎり食べて一緒だ」と友達に関心がもてるように、また、朝ごはんを食べることは大切だということを伝えていく。

- 何月生まれ？…幼児が誕生日をどんなに楽しみにしているか、幼稚園での誕生会のもち方を伝える。
- 幼い頃はどんな子どもだったか？： 子どもたちをどう受け止めていくのかを伝える。落ち着きがない⇒動くことが好き、おとなしい⇒しっかりと様子を見て考えている等、マイナス面で捉えずいいところを見つけていくことの大切さを伝える。子どものいいところをたくさん見つける保育者になってほしいと伝える。

授業を進める度に、どんなことを聞かれるのか楽しみにしている学生もいた。来週の質問をあらかじめ伝えて考える時間をつくる、学生との会話から園や園児等の様子につなげて話をしていた。同時にクラスメートのことを知る機会になり、対面授業で友達に出会った時に直ぐに打ち解けられるようにとの願いもあった。

事例3)「うれしかった出来事」

家で育てていたイチゴが赤くなった！外へ買い物に行けないので注文していた服が届いた！長い間、会えなかった友達と会う約束をした！等、それぞれの嬉しい日常を聞くことで、何気ないことが喜びであることの再発見ができ、授業後、友達の嬉しい話を聞いて、落ち込んでいたが自身も幸せを感じた、嬉しくなって気持ちよく授業を受けることができた、また、色々聞いてほしい等の感想が寄せられた。このような時間を設けることで、友達と時間を共有し、授業に取り組んでいると感じた。

事例4)「好きな絵本とその著者、作者、出版社、その理由を述べよ」

課題であがった絵本を次の授業前に全てまとめて紹介した。友達を選んだ絵本の中で、まだ知らなかったものがあつたら、ぜひ調べてみようと呼び掛けた。同じ絵本を選ぶ人がいて共感が湧く、知らない絵本を知れて勉強になると感想があつた。

表1 学生を選んだ好きな絵本 (抜粋)

「はらぺこあおむし」 エリック カール作・ハミッシュ・ハミルトン	8
「ぐりとぐら」 中川李枝子作・大村百合子絵・福音館書店	5
「しろくまちゃんのホットケーキ」 わかやまけん作・こぐま社	5
「くれよんのくろくん」 シリーズ なかやみわ作・童心社	3
「バムとケロ」 シリーズ 島田ゆか・文溪堂	3
「はじめてのおつかい」 筒井頼子作・林明子絵・福音館書店	3
「からすのパンやさん」 加古里子作・偕成社	2
「そらめくんのベッド」 なかやみわ作・福音館書店	2
「サルくんとブタさん」 たどころみなみ作・汐文社	
「くだもの」 平山和子作・福音館書店	

表2 学生を選んだ手遊び (抜粋)

トントンひげいさん	6
そーめんつるつる	6
やきいもグーチャーパー	5
おべんとうばこ	4
キャベツの中から	4
グーチョキパー	3
オニのパンツ	2
おおさかうまいもんうた	2
いっぽん橋	2
カレーライスのうた	2

「好きな手遊びの紹介」では、絵本と同じようにまとめて紹介し、2～3人前もって声を掛けた学生に、手遊びを発表してもらった。発表者は準備等緊張したようだが、よい機会をもらったと話しており、見た学生も自身がする時のイメージができ、刺激になったと応えている。上記の表は学生を選んだ絵本・手遊びの上位抜粋である。

(3) 授業の成果と課題

- 出席確認のため毎回、課題提出を行った。事前に配布した授業ノートに記入し提出させ、授業内でDVDを用意し、その感想を書かせた。授業資料の提出回は、個別に修正すべき箇所を伝えた。その他の授業では毎回、授業はじめに前回の授業が理解できているかの確認を行った。保育現場のDVDは、学生にとって学びが大きいようで、「幼稚園の生活」「保育所の生活」「幼稚園教

論の仕事」「保育士の仕事」の4つのDVDを使用した。

- 学生同士が共に学び合う仲間意識をもて、安心感や喜び、学びのつながりを少し意識できたようだ。対面授業では緊張してしまい、話せないことが Google, Meet は話せたといっている学生もいた。また授業の終わりに、質問の時間を設け、場合によっては1対1で話した。直ぐに確認できたとの意見があった。
- アンケート結果から少しでもコミュニケーションを取りながら授業参加したいと望む学生は多くいた。一方、ネット環境の差により不具合がある等の課題があった。また、幼児教育学を学ぶことは、相手を観察し、アセスメントする力、そこからどのようにアプローチできるかを柔軟に考える力が求められる。遠隔授業において、どのように進めていくことが、それらの力の育成につながるかは、検討を重ねる必要がある。今後は、グループディスカッションの場を設けること等、学生同士が意見交換していくことも積極的に取り入れたい。

4. 「保育指導法（遊びと指導）」の授業の成果と課題 : 短教1年生

(1) 授業の考え方

幼児期の子どもの生活のほとんどは、遊びによって占められている。子どもの遊びには、幼児期の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれており、遊びを通して子どもは心身が豊かに発達していく。そのため、子どもの発達には遊びは不可欠である。季節や子どもの興味・関心を含めて遊び独自の発達過程をとらえ、その連続性を明らかにしながら、具体的実践例をもとに多様な遊びを体験する重要性を学生の学びにすることが授業の意義である。

本授業は、短期大学部1年生の授業である。今年度、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため大学構内に入ることできない学生に、同時双方向型（ライブ形式）でリアルタイムに行い、大学の授業を受講するという意識を学生がもてるようにと考えた。また、再開された附属幼稚園の子どもたちの姿や大学構内の様子を写真や映像を使って、具体的に伝えることで、保育者の役割や見守りと援助の在り方等について、より身近に受け止め、具体的な学びに結び付いていけるようにしたいと考えた。

(2) 授業の進め方

幼稚園教育要領に「幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものである」と記されている通り、幼稚園における教育環境はとても大切なものである。幼児期の教育を支える教師は、幼児の主体的な遊びを中心に保育を展開させ、遊びを通して一人一人に応じた総合的な指導を進めていくことが必要である。

学生が幼児にとってどのような「環境」が大切なのかを具体的に描けるように、大学構内や附属幼稚園の写真や映像をもとに授業を進めることとした。

① 大学構内の桜の花の写真を見て

「環境」を具体的にイメージしやすいように、春の桜が満開の大学構内の様子を学生に見せることから授業をスタートした。この写真を見ての学生の感想より、学校や友達に気持ちを寄せる学生の思いが感じられた。(写真1 表3 参照)

表3 大学構内で桜が咲いている写真を見て

- ・桜がきれい
- ・大学の様子を見ることができて嬉しかった
- ・桜の花を私も見たかった
- ・友達と一緒に桜を見たかった
- ・学校に行けなくて、残念です



写真1 桜満開の大学構内

② 附属幼稚園の子どもたちの園生活の写真を見て

6月から、附属幼稚園の保育が再開し園児が登園するようになった。新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、消毒やマスクをするという例年とは違う生活が始まった。特に入園したばかりの3歳児にとっては、初めての幼稚園生活に期待と不安が入り混じっている。保護者と離れることが不安な子どもは、泣いたりじっと立ち止まったりすることで自分の気持ちを表現する。そのような子どもの気持ちを保育者はしっかりと受け止めながら保育が始まり、保育者の人的環境がとても大切なことを幼稚園の写真をもとにしながら授業を進めた。幼稚園再開を心待ちにしていた4・5歳児は、昨年度の生活より身近な生き物が好きな子どもたちの実態に沿って、保育室前にザリガニやカタツムリ等を置き、身近な動植物に触れ合えることができるように環境を構成した。授業では、保育者が子どもたちを受け入れている様子や、子どもたちがザリガニに関わっている写真を見せ、子どもたちが安心して幼稚園に来たり、好奇心をもって遊べたりする環境の重要性について話をした。講義終了後、「保育者の援助や配慮について」「環境構成について気付いたこと」を振り返る課題に取り組んだ。



写真2 入園当初の3歳児の様子



写真3 ザリガニに触れて遊ぶ4歳児

表4 附属幼稚園の園児や保育者の生活している写真を見ての学び

① 保育者の援助や配慮について

- ・先生と話すことで、子どもたちは安心している
- ・子どもたちが先生を好きなんだと感じた
- ・一人の子どもだけではなく、一度にたくさんの子どものを見ないといけないのが大変そうだった

② 環境構成について気付いたこと

- ・子どもたちが興味をもつ環境を用意することが大切と思った
- ・写真を見て、ザリガニを子どもはこんなに好きなんだと思った
- ・ザリガニを持っている子どもの顔がとても嬉しそう
- ・友達と話をしている様子が写真から感じられた

(3) 授業の成果と課題

同時双方向型授業（ライブ形式）の出席率は毎回 95%前後であり、最終授業では 97%が出席という出席率の高いものとなった。このことから、学生がつながりを求めていることを感じる。同時双方向型授業（ライブ形式）に参加していなかった学生は、機器がうまくつながらなかったり体調を崩していたりした学生だった。その学生からは、Google Classroom に授業内容をオンデマンドで UP したので授業の様子がよく分かってよかったという感想があった。

また、現在の附属幼稚園の子どもたちや保育者の様子を写真や映像を通して同時双方向型授業（ライブ形式）で伝えることで、幼稚園での子どもの様子を具体的に描いたり質問したりすることができ、学生は幼稚園での様子を身近に感じることができたようである。今後も、保育現場の様子を具体的に伝えていきながら、実践者としての保育力を高めていけるように授業を展開したい。

5. 「保育内容・表現Ⅱ」の授業の成果と課題：短教2年生

(1) 授業の考え方

授業内容は、保育における造形表現の意味、発達の特徴、指導力、身近な自然や視聴覚教材、課題への対応、コミュニケーションを育む製作活動、教材作成（手袋シアター）を設定し進めた。

幼児理解が基本となる指導力を育む内容で模擬保育と保育カンファレンスを遠隔授業で試みたことを報告する。

（２）授業の進め方

① 授業で工夫したこと

- 同時双方向型授業（ライブ形式）が実施できたので、対面授業と近い授業内容を構成した。
- 授業内容は一週間前に配布し、学生の不安を除くよう毎回コメントでフィードバックをした。
- 学生側の通信環境やデータ通信量のことを考慮し、オンデマンドでの配信も実施した。
- 模擬保育はオンデマンド配信が難しいので、参加出来ない学生のために模範になる指導案や模擬保育の様子の写真等を Google Classroom で見られるようにした。

② 遠隔授業「模擬保育」の実践から

- Google Meet を使用し、１クラス６～７人のグループを作り一人ずつ模擬保育を実施した後、グループで模擬保育の振り返りを行い、その後全体にフィードバックを行った。
- 教科担当者は同時に行われるグループに巡回はできても、全てを把握することは困難である。教員が５グループを録画し模擬保育及び討議の内容を知り、次の授業で指導に活かした。

③ 模擬保育及びグループ討議の内容

造形活動の「絵画活動」「製作活動」「造形あそび」から、今回の模擬保育は遠隔授業でも取り組みやすい「絵画活動」を取り上げた。造形活動のねらいや内容が同じでもそれぞれの解釈の違いに気付くように、学生を２人～３人が同じ３歳～５歳児の年齢、テーマで活動の内容に取り組みさせた。

④ 模擬保育について

- ３歳児は、おにぎりの中味をパスで描かせ、パスの使い方を楽しませるための活動を取り上げた。色々な色を選ぶ楽しさを伝え、中味を描いたおにぎりを使ったごっこ遊びに活用していく等、保育を展開することも考えさせた。おにぎりの中味を幼児が想像しやすいよう導入に絵本「おにぎりさんきょうだい」「いろいろおにぎり」を活用し、３歳児は描く事だけで精一杯だと考え、おにぎりの形に紙を用意している学生もいた。
- ４歳児は身近に飼育している亀に興味をもち、甲羅の特徴を捉えて色や模様を描いたり、亀の頭や手足の動きにも気付いたりして描く活動を取り上げた。幼児の身近な環境を読み取れず、亀が少しだけ出ている絵本を導入に使う学生もいた。中には、色々な甲羅に気付かせるために絵本「みーんなかめ」を教材研究したり、甲羅の模様の見本を作成したりする等、幼児に分かるようにする工夫も見られた。
- ５歳児は、保育の設定を１０月にした。体を動かす事が多くなる時期である。体の動きに興味をもたせ表現を工夫することから友達と互いにポーズを考えて描いていく活動を取り上げた。運動会を導入にする学生が多く、例題として跳び箱を跳ぶ足の動きをイラスト等で紹介する様子も見られた。パソコンと携帯の両方を使用して互いの実践を確認する姿も見られた。

遠隔授業では、人前で話す機会が少なくなっている。学生のミーティングの録画を見ると幼児への声掛けを実践し、互いによかったところや改善点等の意見が活発に出ていた。活動中の幼児への声掛けが難しかったという意見が多く、具体的な活動や環境構成は書けるが予想される幼児の姿が思い描くことが難しいことが分かった。

⑤ 模擬保育とグループワークからの学生の考察

- ・模擬保育等出来ないと思っていたが、自分で指導案を書いてグループに分かれて数人の前で模擬保育をすることができて本当によかったと思う。
- ・模擬保育の時は、先生が Google、Meet へ参加したり、録画を見せてもらったりして安心感があった。課題にもコメントが返ってくるので、改善点を考えたりすることができた。
- ・活動中の声掛けの援助を臨機応変に対応するため、子どもの行動を様々に予想することが大切だったと思った。
- ・各年齢2人ずつ模擬保育をすることで、同じ活動内容で保育を考えているにもかかわらず、全く違う活動になることに気付いた。
- ・グループで意見を聞き、よかった点、改善点を客観的にアドバイスしてもらえて、自分の模擬保育をさらによいものにしていこうと意欲が湧きました。
- ・友達の保育を見る中で、自分では考え付かないアイデアが沢山あり、よい経験になった。

写真4 学生が模擬保育で使用した教材



⑥ 学生のアンケートから（125名中125名提出）

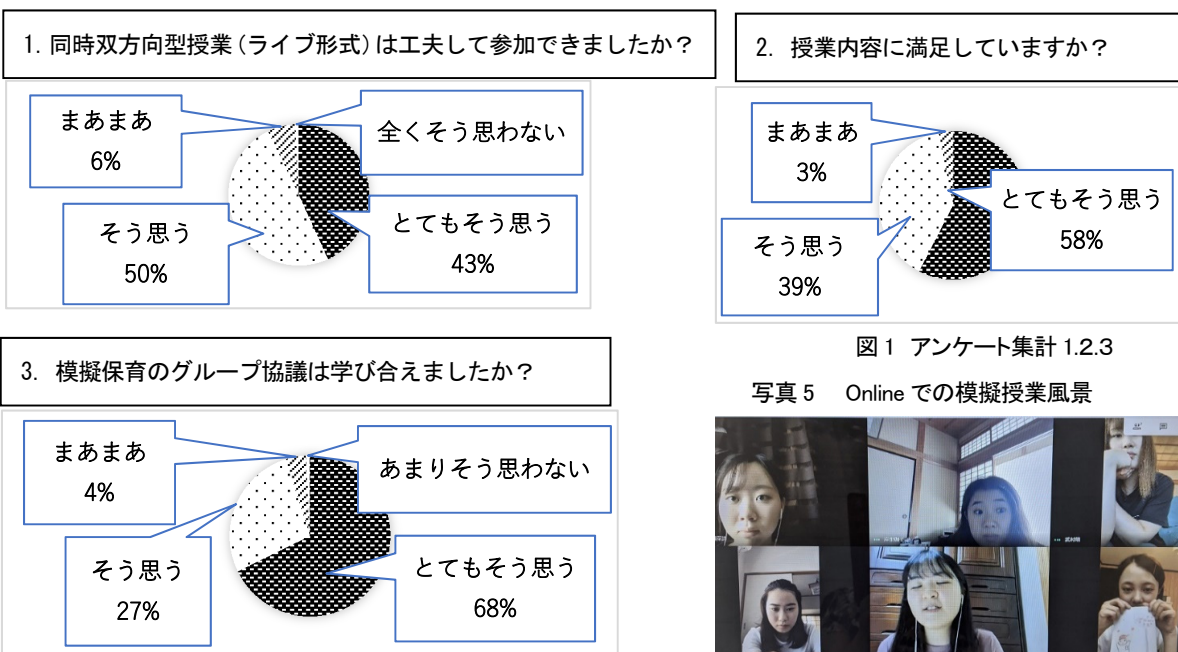


図1 アンケート集計 1.2.3

写真5 Onlineでの模擬授業風景



（3）授業の成果と課題

アンケート結果から、同時双方向型授業（ライブ形式）は、グループでの模擬保育に工夫し参加出来た学生が多く、2年生は1年生の時の人間関係があり、お互いに教え合うことが出来たからだと考える。また、Google、Meetで仲間と学び合う機会を設けたことで、コミュニケーション力や自ら気付く学びが実践できた。同時双方向型授業（ライブ形式）で、対面授業と変わらない授業ができた。導入に絵本や手遊びを入れて、本来の活動の時間が短くなった反省や導入に使用する教材は、ねらい

に合ったものが必要ということ等を実習前に気付くことができた。レポートや指導案作成だけでなく実践することが、いかに学生にとって学びが多いかを知ることができた。

6. 「保育内容・環境」の授業の成果と課題：大教3年生①

【脇】

(1) 授業の考え方

「保育内容・環境」を対面式となるべく遜色のない形で進められるよう、授業での学び方を考えた。授業内容の分かり易さ、同時双方向型授業（ライブ形式）の特色を生かすための教材準備や授業の組み立て等を工夫することで、学生が前向きで主体的に授業に参加し取り組めるのではないかと想定した。また事前課題としては「環境」の意義や飼育動植物についてのレポートの作成と手袋シアターの制作を課し、授業への期待を高められるようにした。

(2) 授業の進め方

- 教科書の「保育内容・環境」（横山文樹編者）をシラバスに沿って PowerPoint で解説する。
- 事前資料として講義内容の言葉が埋められるプリントの配布、事後に回答文等を用意する。また Google Classroom で資料を配布する事で、リアルタイムでの参加が難しい・パソコンの環境が整いにくい学生が学べるように配慮する。
- 「保育内容・環境」の人的・物的・自然・情報・地域・安全について保育者・幼児・保護者の様子を DVD で視聴し、グループワーク・まとめ・発表等を通して理解が深まるようにする。
- 学生が今後保育実習を様々な「環境」という視点をもって体験できるように、指導案の立案や制作活動、手遊び、歌、絵本の読み聞かせ等をする。
- 抽象的な言葉や専門用語は、実際の場面ではどういうことを表しているのかが理解できるよう、現場での幼児や保育者の姿を話し、実践事例の具体的な写真等を提示する。
- 「保育内容・環境」を学ぶ前に幼児の新聞への投稿記事から読み取れる事を感想として提出し、学び終わってからの感想と比較することで、読み取りの視点がどう変わっていったのかを分析させ授業内容の理解度について学生自身が客観視できるようにする。
- 学生に授業後の課題と共に毎回感想も提出してもらい、授業の進め方等を改善をしていく。

事例 5) Google Meet のコメント機能を使って：

〈5月の授業で多くの園で栽培される夏野菜の苗を紹介し、Google Meet のコメント機能を使ってクイズをする〉

学生からの感想として、すごく楽しかった、全然知らなかったので買物に行った時に見てみる、今度は答えられるようにしたい、実家が農家なのに答えられなくて悔しい等と好評で、一番多かったのは、次もクイズに答えたいという感想であった。そこで学生からの要望に応えられるよう多くの園で植栽されている四季折々の花の名前クイズを作成した。

〈季節の花の名前を知ろう〉

季節的に夏の花から始め、授業内容に合わせて時間をとり春と秋のクイズを授業に取り入れた。今回のポイントは、誰でも知っている花も多く取り入れ、みんなが数回は回答できるようにする事である。実施後の学生からの感想としては・楽しかった・答えられて嬉しい・花屋を見て花の名前を意識するようになった等が多く寄せられた。また秋の花では、紅白の彼岸花を紹介したが、黄色の彼岸花を見たという感想があり、写真を送ってくれた学生もいた。

(3) 授業の成果と課題

チャット機能を利用することで、誰もが気楽にすぐに参加できたことである。大勢の中では意見を

言いにくい学生がいてもチャット機能であれば気兼ねなく言え、参加しやすい事である。これは対面式の授業でも十分生かせると思うので、学生のグループワークの前に自主的に個々が参加するツールの一つとして、またコミュニケーション能力を育て対話的で主体的な深い学びの授業を提供する意味で有効であると考えます。

同時双方型授業（ライブ形式）を実施した中で一番多く感じたことは、学生の孤独感である。出席調べだけでも一言ではあるが先生と話せて嬉しい、私に話し掛けてくれる感じがするというコメントが多かった。また感想を毎回授業の後で提出してもらい、授業での話すスピードも改善できた。

学生からのコメントは失敗しても励ましてくれることが多く、毎回楽しみにしているという事を実感できた。最初は拙い操作で、学生に不便も掛けたが、学生からの直接的なコメントを基に、90分授業を成立することができた。講義と別に、クイズと一緒に音楽を流しながら手遊びをしたり、歌を歌ったり、1分でできる製作や絵本の読み聞かせをしたりする中で、学生に必ず気持ちが伝わるよう発信する側として、学生の前向きに学びたいという思いに応えたいという熱い気持ちがもてた。最後の授業では、無事終えた安堵もあるが学生とともに作り上げた授業の終了の寂しさと感謝に涙がこぼれた。初めての授業形態ではあったが試行錯誤を繰り返す中で遠隔授業のよさも実感できた。

また発信する側として大学での研修に参加はしたが、新しいことが始まるという理解に留まっていた。少しでも技術を習得し、孤立化しないように操作に慣れ不安が少なくなるよう自主的な meet 会議を授業が始まるまでに繰り返ししてもらったことや、失敗した時も相談ができ、授業展開について教えてもらえる大学教員の存在が大きかった。そのつながりもなく、一人で遠隔授業をするにはシステムを理解するまでのハードルは高い。

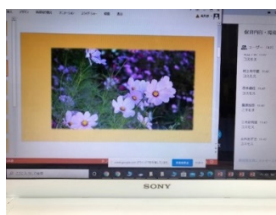


写真6 （左）手遊びをする学生
（右）花のクイズの画面

7. 「保育内容・環境」の授業の成果と課題：大教3年生②

新型コロナウイルス感染予防対策で遠隔授業になったと知ったその日から、直ぐにカメラ付きパソコンを求め、アナログな世代の私と web に洗練された動画を見慣れている学生との間に授業が成立するのか？不安な日々が続いた。正にマイナスからの出発！であった。

クラスルームは研修後、立ち上がったが、その後の操作で右往左往し、授業準備以前の問題が発生した。毎日のように大学へ通い、専任の講師の先生方や非常勤の仲間たちに教えて頂き、遠隔授業スタートに間に合い、最低限、受講生に迷惑が掛からないと安堵したのが、この前のように思われる。このような初体験の中でたくさんの確かな学びがあった。その実践事例を書き記したい。

（1）授業の考え方

つながりを大切にしたい授業と同時双方向型授業（ライブ形式）の効果の発揮の追究を目指していく。

① 心掛けたこと

- 学生に伝わり易い内容を工夫すること。質疑応答の時間を設定する。
- 90分間、メリハリのある変化をもつ授業内容にする（DVD 視聴、写真配信、実技の実施…折り紙や絵本の読み聞かせ等を一人一人全員の発表の様子を画面上に映る場を設ける）
- 講義は PowerPoint 動画で行うこと（現場の事例を話し、幼児の様子が分かる授業をする、

集中できるようにポイントを押さえる等)

- 淡々と説明する動きの少ない映像は集中力が保てないため少なくすること。
- 毎回授業課題（テーマによる考えや調べ物を文章化する，本日の感想，授業アンケート，環境クイズ等）と事前に授業資料（穴埋め式）を配信する。

② 授業の進め方 ～90 分間，変化をもつ毎時の授業～

- 出席確認… 名前を呼び一人一人の返事の声聞く。声掛けをして関係を図る。
- 理論… PowerPoint 項目を絞っての説明，集中が保てるよう対面より短くする。
- 実技… 季節の折り紙と年齢別発達を考慮した折り紙（環境の構成の壁面制作につなげる）
- 課題整理と質問タイムを設ける。
- その他…授業に沿った幼児の環境とのかかわりの DVD，花や果物の動画発信，植物や野菜クイズ等，画面上の絵本の読み聞かせと PowerPoint 動画発信で絵本の読み聞かせを随時入れていく。絵本の読み聞かせの指導案の作成を最終課題とする。

③ 遠隔授業の中での実技（折り紙）を通して

事例 6) 季節の折り紙

学生が，折り紙の折り方や見せ方の工夫の大切さを知り，幼児にとって折り紙からどのような力が養われるかを考える。担当教員は，幼児への配慮等を説明し，折り紙制作の時は装飾の仕方やカード見本，ミニ壁面を準備して幼児が折りたい気持ちになってから作ることを学生に伝える。

5 月 あやめの花と葉（12 日）立体化した薔薇の花と葉（19 日）自然環境 DVD 視聴のため折り紙は無し（26 日）

6 月 おたまじゃくし（2 日）跳ぶ蛙（9 日）※写真 9 日折り紙カード作りの課題を出す。
コロナ対策ハンカチマスク（16 日）絵本の読み聞かせのため折り紙は無し（23 日）人的環境 DVD 視聴のため折り紙は無し（30 日）

7 月 七夕笹飾り・・・提灯，貝殻つなぎ（7 日）複雑貝殻つなぎ（14 日）

4 歳児対象の切り込み入りひし形つなぎ（21 日）朝顔（28 日）4 歳児の笹飾りの実物を見る。

④ 学生の感想（抜粋）

- ・初めての同時双方向型授業（ライブ形式）は，不安だったが，先生の顔が見え声も聞けて安心した。遠隔授業は不安に思っていたが，とても分かりやすかった。
- ・PowerPoint，折り紙と色々したので楽しく授業が聞けました。
- ・折り紙きれいに仕上がった。来週も楽しみにしています。有難うございました。
- ・折り紙がとても楽しく，家でも何か折りたいと思いました。毎回して教えてください。等この感想を受けて，できる限り毎回折り紙の紹介を入れていった。

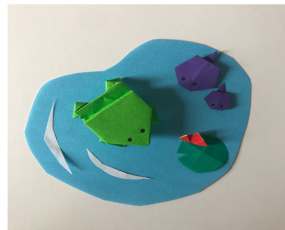
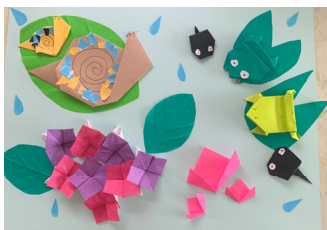


写真 7 学生の折り紙の作品

DVD 視聴で折り紙の時間が取れないときの感想は，

- ・今日は折り紙をしなくて残念だった。

- ・DVDを見て環境の大切さが分かった。でも、折り紙の時間がなかったので残念です。
- ・授業の関係で時間がないのは分かりますが、短時間でも折り紙を毎回してください。

教育実習等現場で活用ができ、現場の環境構成や季節ごとの壁面制作に興味をもち、幼児を取り巻く自然環境などに目が向くようになることを学生に期待したい。折り紙から更に環境や表現活動にも関心をもち、幼児に教えられる技能等を習得し作る喜びや楽しさを感じてほしいと考えた。

⑤ アンケート調査

初体験の同時双方向型授業（ライブ形式）を慎重に進めるため、また、学生一人一人のwebの環境を把握するために授業が「よく分かった」「分かった」「分からなかった」「その他」の4項目で4回目まで46人アンケートを行った。

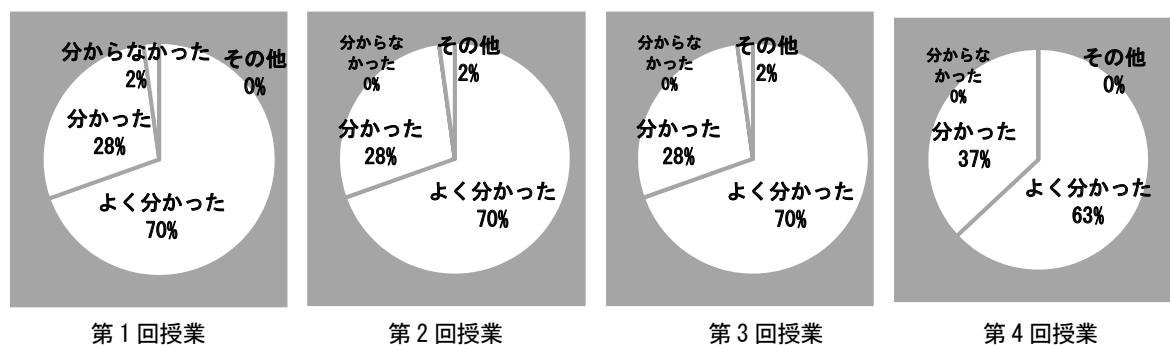


図2 授業アンケート集計

アンケート集計結果から、授業の内容についてはよく分かったと分かったが98～100%であるので、概ね理解できていることが分かった。分からなかったのう回答は、操作が分からなく途中で気付いたという理由があり、授業の回数が進むと操作に慣れてきて分からなかったと答える学生はいなかった。

（3）授業の成果と課題

授業前は不安であったが、目的意識や配慮する事項を掲げ目指す努力をしていくと学生に懸命さが届くと確信した。最終授業終了日予期しないことが起こった。退出際に「ありがとうございました」と次々とお礼や「楽しかったです」の感想が聞けた。チャットに「ありがとうございました」と書き込む学生もいて感激してお互いに感謝の気持ちを伝え合うことができた。遠隔授業は一方向と思っていたが、気持ちをつなぐことができると分かった。遠隔授業の中で関係作りができ、得るものが大きかった。同時双方向型授業（ライブ形式）は笑顔と元気が届けられるよさを学んだ。

8. 保育指導法（保育と環境）の授業の成果と課題：大教4年生

（1）授業の考え方

この科目では、子どもたちの健やかな発達を保障できる環境構成・環境の再構成について事例等具体的な姿を通して学びを深められるようにした。遠隔授業ではどうしても一方的な授業になりがちである。それでは受け手となる学生にとって長時間集中することもできにくく、また一人で学習しているような思いになってしまう。少しでも、学びの喜びを実感できるようにと送り手、学生同士のつながりをもてるようにと考えた。

（2）授業の進め方

① 手遊び及び制作物を使つての発表

一人1回画面に登場して2～3分のもち時間で発表する。乳幼児のどの年齢対象でも可とする。画面の先の相手が見えないことで緊張感が増したり、相手の反応が見えないことでの不安感があったり

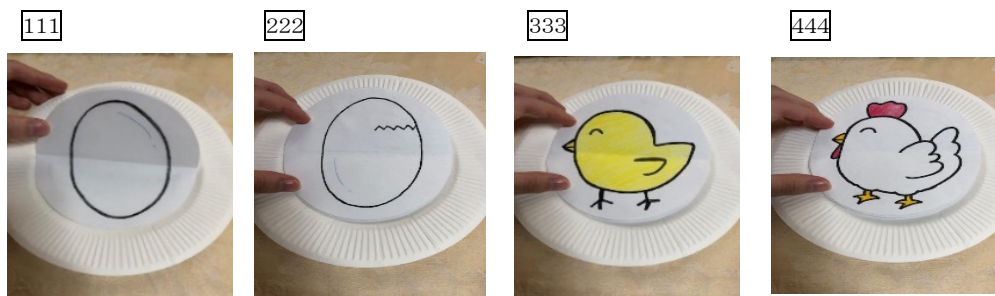
したが、自分の演じる様子を客観的に見ることができ、よいところ、反省すべきところ等が分かり楽しんできたという感想が多かった。6回に分けて、希望の日をとり行った。事前に何をするかについての予告なしに順々に行ったことから、内容が前の学生と重なり予定していたことを急遽変更して実施した学生もいた。そんな時でも対応できるように、遊びの内容をいくつかもっておくことの大切さに気付いたという意見もあった。相手が見えないが、右隅に一緒に楽しそうにしている人の映像が映ると、安心し励みとなったようだ。画面の向こう側にいる人が見えるということは大切である。

友達の発表を見ている人にとっては、動きや表情がよく分かり、友達の顔を見られること、声を聞けることはとても嬉しく、一緒に授業を受けているというつながりを感じることができたという感想が多かった。直接友達に感想を言葉で伝えることができなくても、チャットで感想を伝えると、発表した人にとってより励みになったのではないかという意見があった。手遊びをする学生が多かったが、紙皿での場面展開を活用しながら歌遊びをする学生もいた。

事例7) 紙皿歌遊び「ころころたまご」

- | | |
|-----|------------------------------------|
| 111 | ころころたまごはおりこうさん　ころころしてたら　ひびわれた |
| 222 | ぴきぴきたまごはおりこうさん　ぴきぴきしてたら　ひよこになっちゃった |
| 333 | ぴよぴよたまごはおりこうさん　ぴよぴよしてたら　こけこになっちゃった |
| 444 | ころころ　ぴきぴき　ぴよぴよ　こけこ　こけこがないたら　よがあげた |

写真7　紙皿制作「ころころたまご」



<感想>・実際に発表すると一人で練習している時とは違い、少し緊張しました。

・紙皿の見せ方や声の大きさが難しかったです。

・既存の歌に加えてひび割れた卵を加えたところがポイントです。

② 授業課題作成時に考えたこと、調べたことを友達と共有する

毎時終了後授業課題を出し、提出をもって授業出席扱いとした。課題の内容として、授業に関することでポイントを絞って調べる、授業内容を振り返りまとめる、保育の展開について考えるといったものである。

授業の最後に作成の時間をとり授業内で仕上がるようにした。自分で調べることで新たな気づきがあり、内容を振り返る、また自分で考える場面を持つことは、よい学びになったと感じたようである。そして、課題で学生が記述した主な事柄を次の授業の中で伝え、自分の意見を全体に広げるということで参加意識を持つことや自分の考えを広げることにつなげた。

課題活用場として次の授業時に課題で述べられた意見紹介をし、友達の考えに触れる機会とした。また、次の授業内容に繋がれるところは、学生の意見も授業の中に取り入れられるようにした。

事例8) 自然環境について

自然環境に出会い関わることによる子どもの育ち（生き物、植物や栽培活動）について、具体的事例やDVDを通して学ぶ。生き物とのかかわりを支える環境や援助について考える。

＜課題：セミの生態を調べる（3種）、チョウが集まる環境（草木）を調べる（3種）＞

※保育者自身が生き物のことをより深く知ることが、子どもの興味関心を深めていくことに繋がる。

- セミの鳴き声、鳴く時間帯・時期について学生のレポートから主なものを紹介する。（アブラゼミ、クマゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクホウシ等）これからの時期実際にセミの鳴き声を聞いた時に何ゼミかなと興味をもって保育者自身がセミに目を向け関心を寄せるように伝える。
- アゲハ、アオスジアゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、ツマグロヒョウモン等身近にみられるチョウが集まる植物について、友達が調べたことを伝える。園内の環境として、そういった植物を植えておくことが、子どもがチョウと出会う機会に恵まれることになることを話す。調べることで、共有することが、自分の知識を増やし、興味をもつことに繋がり、子どもにとっての望ましい環境を考えることになったという感想を得た。

事例9) 物的環境

物的環境を生かした保育事例を通して、物的環境を設定する際の留意点、幼児の学び等を考える。

＜課題：物的環境（大型積み木）を使つての遊びの展開を考える。＞

- 7月の課題であったので、その時期に合わせた内容を考える学生が多く、基地ごっこ、お化け屋敷ごっこ、船を作り、探検に出かける、乗り物にする等の事例を交流した。遊びの展開の広がりにつれ、大型積み木の物的環境が広く活用できること、子どものアイデアを大事にしながらも保育者自身が広くアイデアをもっておくことが大切であると感じたようだ。

（3） 授業の成果と課題

今回、できる範囲での学生のつながりをもつ場面をつくった。少しであっても学生は、友達との関わりでの安心感や嬉しさ、同じ場面で学んでいるという意識がもてたようだ。しかし、学生同士の顔が見えない、意見交換ができない等の課題がある。具体的な場面を想定し、自分で考え、友達の考えを聞き、考えを広げるということは学びを深めることに於いて重要である。その方策についての課題が残る。グループに分け話し合いの場をもつとよいという意見が学生からあった。その点も含めて、遠隔授業については今後工夫を重ねることが必要である。遠隔授業で学生同士の意見交換や交流についての課題から、その大切さや必要性について以前より増して考えるようになった。今後の対面授業で、その重要性をより深く認識して授業を進めたい。

9. 遠隔授業を通しての成果と課題

遠隔授業をすることに決まってから、先ず、授業開始までの短時間にパソコン操作に慣れることから始まった。同時双方向型授業（ライブ形式）を進めていくと決定してから、パソコン操作、Google、meet と classroom の使い方、活用の仕方等、新しく取り組むことが多々あった。不安になることも多く、四苦八苦しながら、研究グループで力を合わせ協力し合い、「学生のために」という合言葉と共に授業に臨んだ。全員での練習、個々、それぞれ少人数で練習をする等して備えていったが、実際に始まってみると、緊張し手間取ることもあった。この経験の中で、私たちはたくさんの学びを得ることができた。学んだことを互いに確認し合い、学生への向かい方を改めて考える機会となった。

成果としては、4点あげられた。第一に、PowerPoint 声入りオンデマンドの作成では、やり直しを繰り返したことで、自分の話し方、話の進め方等振り返る機会となった。第二に、学生が友達の声が聞け、顔を見ることができて嬉しかったという思いは、担当教員も同様に感じ、online で相対する時の嬉しさを自らも感じることもできた。第三に、学生の協力のおかげで同時双方向型授業（ライブ形式）を無事進めることができたが、右往左往しながらも、初めてのことに取り組む姿、必死さは学

生にも通じたようで、一生懸命な姿は、今後自分が教員になった時の姿勢として学びとなったという感想があった。学生の気持ちとしては、同時双方向型授業（ライブ形式）が極端に少なく、オンデマンド型授業は、課題提出が多く大変だと伝えてきた。画面を通してではあるが、教員が目の前にいて授業をする、自分の意見を伝えるとコメントが返ってくる授業は、楽しみにしているようであった。第四は、担当教員は、はじめての遠隔授業（ライブ形式）に戸惑いながらも授業の回数が進むにつれ工夫し、学生同士がかかわれる機会がつかれるよう、学生の発表の場やグループトークの時間等、授業の工夫をしていった。今後も、省察しながら工夫し、授業を展開していきたい。

課題としては、対面授業が難しい中、同時双方向型授業、オンデマンド型授業を、今後さらに駆使し活用する必要がある。遠隔授業について、教員が授業の構築、工夫や努力が不可欠である。一方、オンデマンド型授業は、ネット環境に振り回されず、いつでも閲覧できて、復習もできるメリットがあると同時に、時間管理を任されるため、オンデマンド型授業のみでは難しいと感じる学生もいるようだ。対面授業の時に比べ、各教科での課題は少なくとも、全体の教科の量が多く、結果的に課題に追われる一因となっている。特に、遠隔授業となり、課題が増えたことは、学生にとってかなりの重圧になっており、学びとして大切と感じながらも、課題をこなしていくのに精いっぱい自分に対して、「保育者が務まるのかどうか？」と悩みを吐露する学生も何人かいた。教員の方も学生の反応をダイレクトに感じることに難しいため、授業理解度等、学生との間にずれが生じた場合、修復に遅れが生じる可能性がある。しかし、同時双方向型授業（ライブ形式）は、学生の声が直に聞けるよさがある。授業の振り返りを丁寧にしていくこと、授業の進め方に工夫していくことに努めていきたい。「学生のために」という気持ちを今後も確かに研鑽を積んでいきたい。

10. 最後に

はじめての遠隔授業の試みは、多くの方々にサポートいただき、どうにか前期授業を終えることができた。一人一人の取り組みと、そのチーム力があってこそ成し得たことだと実感している。まだ始まったばかりのこの授業形態に於いて、今後もよりよい授業を目指していくことが課題である。私たちは、少なくとも教員養成は、専門知識と共に幼児（人間）を相手にしている職業を選択することである。心のひだに触れ、心を読み取り、幼児を育てる大切さを実感する教員を送り出すことを目指している。それが幼児教育の専門性を育てることだと考える。その中に於いて、学生との交流や思いを受け止めることは不可欠である。Google, meet を開設し、学生の声や質問に応えられる時間を設けたことは、学生と話をしたり、思いを聞いたりできて有意義であった。私たち教員も前向きにチャレンジしていくという大切さ、学生のためにという気持ちを今後も貫いていきたい。

その後、後期、学内で出会った一年生から、「先生！」「会えて嬉しい！」と声を掛けられた。学生たちとつながりが少しでも築けたことを感じ、「学生たちのため」に研鑽していきたい。

参考文献

- (1) 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館, 2017 年
- (2) 厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館, 2017 年
- (3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館, 2017.
- (4) 勅使千鶴『子どもの発達とあそびの指導』ひとなる書房, 1999.
- (5) 中井清津子『かく・つくる・造形遊び』株式会社サクラクレパス出版部, 2019.
- (6) 大阪保育問題研究会美術部会・大阪保育所研究所『絵は子どものメッセージ』かもがわ出版, 2014.
- (7) 福元真由美編著『領域 環境』萌文書林, 2018.
- (8) 横山文樹編著『保育内容・環境』同文書院, 2018.